
真似してみよう夢十夜

中等遊民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真似してみよう夢十夜

【Nコード】

N9541V

【作者名】

中等遊民

【あらすじ】

夏目漱石の異色の短編集「夢十夜」。

敢えて大文豪に挑戦し、晒してみよう、十の夢。

オチなし。笑い無し。カタルシス無し。

整合性のないイカれた夢の世界こそリアルなのか、それともウンザリするほどつまないリアルこそ夢なのか……

はじめに

ストーリーとして最低限のオチもついていない、とりとめのない話をWebにあげるのは公害だという論を聞いた事がある。確かに、そのとおりなのかもしれない。一方で、事前に警告すればガミガミしなくていいじゃん、と脳みその反対側で思ってみたりもする。

文豪、夏目漱石の短編集に「夢十夜」という作品がある。十個の夢の記録集みたいなもので、きちんと物語の形をなしたもののから、一見すると全くオチのないような話まで、支離滅裂な様々な夢の状況が時に幻想的、時に怪奇的に記されている。でも、さすが大文豪の書く文章のせいか、私はこの「夢十夜」という作品を飽きずに楽しんで読むことが出来た。「へー、あのひげのおっさん、こんなこと考えていたんだあ」と明治期の東京・本郷界隈へ想いをはせる。

本題はここから。実は私は、周囲の人よりよく寝ていて夢を見るようだ。強く記憶に残っている夢が多いわけではないが、とにかく二日に一度は、起床時に夢を見た記憶の残滓が脳に巣食っている。夢で活動的に動きすぎ、朝起きるとひどく疲れてしまっていることなどしょっちゅうのこと。実は夢の中の活動的な自分が存在する世界こそ実在し、重く気だるい嫌気のさす日中の世界こそ夢なのではないかと真面目に葛藤した事もある。

そういうわけで、よせばいいのに文豪の真似をしてやってみた、夢晒し。私は中等遊民というHNでなろうで活動しているが、夏目漱石は「高等遊民」という階層の人間を主人公に置いている事が多い。一方、リアルな私の精神は完全に「遊民」のそれである。（食うために働きながら、労働を心の底から憎悪している）

実力や有様を考えれば下等遊民と自称したいところだが、一応、両親には最低限の高等教育は受けさせてもらったので、まあ自称中等が妥当かなあ、と。

そんな中等の腐れ遊民が、明治の文豪に挑戦するわけで、他人様から見れば片腹痛いことこの上ないだろうが、面の皮を厚くして、晒してみよう夢十夜。

第一夜 ツキノワグマ

幼い頃、こんな夢を見た。

深い山奥にある博物館へと私はやってきた。真新しく、小奇麗だが人気少ない、郷土資料館のように小さい博物館だ。幼い私は一人そのひなびた博物館へと入っていった。すると、薄暗いロビーに二人の同年代の男の子がいた。名前は忘れてしまったが顔だけは覚えている。当時同級生だった二人組みだ。

二人とも特に親しかったわけではなく、ほとんど話したこともない相手で、一人は太っており、もう一人は痩せていて、私より背が高かった。

当時、今よりはずっと社交的だった私は、屈託無く彼らに話かけ、薄暗い博物館内を共に展示物を見て回ることになった。多くの鳥や獣の剥製や、植物の標本がライトアップされて並んでいる。

そして私達は、直立したツキノワグマの剥製の前にやってきた。背丈は二メートル以上ありそうな、大きなツキノワグマだった。ガラス張りの展示ケースの向うで、そのクマは直立したまま腕の前に突き出し、牙を剥いて私達を見下ろしていた。胸元の白い三日月が黒い体色と強いコントラストとなって映えていた。

私達が隣の展示物に注意を移しときだった。突然、剥製であるはずのツキノワグマが首を振り、大きく咆哮した。そのクマは生きていた。背後で唸り声とガラスの割れる音が聞こえた時、恐怖に駆られた私達はすでに博物館の出口めがけて走り出していた。

私達三人は息を切らせながら展示室を駆け抜け、廊下の突き当たりにあるエレベーターへと駆け込んだ。昔から人一倍足が遅かった私はすぐに息切れして脱落した。一緒だった二人は、すでに突き当たりのエレベーターへたどり着き、コンソールボタンを叩いている。緩慢な動作でエレベーターのドアが開いてゆく。私はもう逃げ

切れないと思い、直進してエレベーターには向かわず、左へ曲がって展示ケース陰へと逃げ込んだ。仲間の二人はエレベーターへと駆け込み慌ててドアを閉めようとしていた。クマは大きく吼えると、直立したまま私の横を猛スピードでエレベーターへと突進した。クマが横を通り抜けたときの荒い息遣いは、まるで私の鼓膜に焼きついたように今でも覚えていいる。

悲鳴が聞こえた。クマはエレベーターのドアを押し開き、エレベーターの籠へと二人を追い詰めた。エレベーターのドアが再度閉まり出した。開く時と同じくらい、ひどく緩慢に……

すると、立ったままのクマがなぜか私の方を振り返った。クマがこちらを睨んで吼えた。両側からドアが閉じられてゆく。私は急いでエレベーターのドアへ駆け寄り、床に落ちていた大きな石つぶてでエレベーターのコンソロールを叩き壊した。（なぜそこに都合よく石つぶてがあったのかは、私にも判らない……）

とにかく、コンソロールを壊さなければ、ドアがまた開いてしまうと思ったのだ。コンソロールのパネルが割れ、火花が噴出す。私を凝視するクマが、両側から閉じられるドアによって視界から消えた。中からゴトンゴトンという暴れる音が聞こえたが、それもすぐに静かになった。

私はベソをかきながら博物館のロビーへとたどり着き、明るい外へと逃げ出した。私は大人に助けを求めようと背後を振り返ったところで、夢は終わり目を覚ました。

大汗をかき、パジャマが体にはりついていた。

第一夜 ツキノワグマ（後書き）

夢というのはまことに手前勝手なもので、夢のなかでは平気で他人をたばかったり、見捨てたり、酷い時には殺したりします。小学生の頃からこんな救いようの無い、独善的な夢を見ている私の精神レベルもおのずと知れたものです。

今になって思うと、エレベーターの外のコンソールを壊しても中からのドアの開閉には影響ないでしょうね。当時、なんでこんな事を考えたのかというと、子供の頃に興奮して見ていた映画「スターウォーズ」で、よくシャッターやドアを閉じた後、反対側から開けられないように操作パネルをぶっ壊すシーンが複数でてきて、それが印象に残っていたからです。

ちなみにこの夢のせいか、私は今でもぬいぐるみ以外のクマって動物はかわいいとは思えません。

第二夜 蜂塚

二年前、こんな夢を見た。

空にどんよりと雲が被さった夕方、風を背に受けグイグイと自転車ペダルを踏む。いつもの見慣れた帰り道を、風を切って進んでいた。いつもの交差点で私は信号に引っかかり、ブレーキレバーを絞った。

長い信号待ち…… 自転車にまたがりながら、国道の往来の反対側をぼんやり見ていたら、いつのまにできたのか、まったく見慣れない構造物が目にとまった。赤土を塗り固めた奇怪な高い塔が、道路向かいの家屋の敷地に建っていた。敷地の石塀越しに高くそびえる泥の尖塔の外壁は不規則にでこぼこしていて、それはまるで巨大な蟻塚を連想させた。

もう少しで信号が青に切り替わろうとする時、その蟻塚の頂上がにわかに動き、土壁がわずかに崩れて下へと落ちた。

—— やっぱりなにかいる！

私は、気色の悪い現象に色を失い、信号が青に変わっても蟻塚を見据えたまま動けなかった。すると、少し崩れた塚の頂上から、黄色と黒の攻撃的な配色の、異様な生き物が這い出てきた。太くくの字に曲がった触覚。片方だけでソフトボールくらいありそうなギラつく複眼。脈の通った半透明の羽。そして、うねうねと動き、黒と黄色の縦縞に彩られた湾曲した腹……

姿形は決して見慣れない生き物ではない。テレビや図鑑ではよく目にした事のあるスズメバチだった。ただ、そのサイズは大型犬くらいある。遠くだが、一目でその巨大さが判った。そうするうちに塚の上部はさらに崩れ、八ちは次々に外へと這い出してくる。

鼓膜を逆撫でする重低音の振幅と共に、八ちたちは一斉に宙へ舞った。八ちは次々に沸いて出ては辺り一面を飛び回り、猛烈な羽音

が、一帯の大気を満たす。羽音以外の音はほとんど聞こえない。

きつと、あまりのことに驚いたのだろう。国道を走っていたトラックがコントロールを失って中央分離帯に乗り上げ、私の目の前で横転する。そこへ後続のワンボックスが突っ込み、金タライをひっくり返したような大音響が羽音に紛れて聞こえてきた。ハチたちは、まるで獲物を見つけたかのように、事故車へ群がる。すでにあたりの通行人や車は恐慌をきたし、ハチから逃れようと走り出した。クラクションや叫び声がかすかに聞こえたが。それも猛烈な羽音に遮られてしまった。道路の反対側を走っていたおじさんは、上空からハチに襲い掛かれて道路に押し倒されるや、頭をかじられはじめていた……

とても正視できないので目を逸らし、走り始めたが、ふと去年の秋のニュース番組を思い出した。確か、ハチは自分より下方の視界があまりないので、もし襲われた場合、なるべく身を低くするようにとアドバイスしていた。それに、急な動作はハチの注意を引いて危険だ。夢の中では私は冴えているのだ。

私は四つん這いになっていそいそと、地獄絵図となった交差点から離れはじめた。頭上ストレスを巨大なハチがかすめる。アスファルト路面の鋭いでこぼが掌と膝頭に突き刺さり、非常に痛む。夢の中で痛みを感じないというのは私は嘘だと思う。少なくとも経験したことのある痛みは、かなりリアルにフィードバックされることがある。わたしは掌と膝頭に走る痛みを耐えながらひたすら這ってゆく。もう耳には猛烈な羽音しか聞こえない……

——逃げなきゃ、逃げなきゃ、はやく逃げなきゃ……

そうやって這っているうちに目を覚ました。思わず両の掌を目の前に掲げてみる。傷などあるはずも無いのだが、四肢にアスファルトが刺さる痛みと、脳にへばりつくような猛烈な羽音の残滓だけは、布団に起き上がった後でもはっきりと焼きついているようだった。

第二夜 蜂塚（後書き）

そういえば中学生だったころ、メガネはずして髪をやや短くすればシンジ君に似てるかもと言われた事があります。でも残念な事に、私のまわりには綾波もミサトさんもいませんでした。（アス力はどうでもいい……）

もっとも、私はシンジ君じゃないので「逃げちゃ駄目だ」じゃありません。

この夢は、人生いつも逃げの姿勢ばかりな自分に対する警告だったのでしょうか？ ただ、巨大な蜂に襲われつつあるこの状況で、本当に勇気のある人だった一体どうするのだろう？

たたかう？　じゅもん？　あやまってゆるしてもらおう？　クソゲー的な選択肢しか思いつきませんね。

二夜続けて動物災害な夢になってしまいました、次回はちょっと毛色のかわった夢の話になるでしょう。

それにしても夢で害獣にやられる事がとても多いです。

第三夜 深夜のドライブ

一年前、こんな夢を見た。

アクセルをわずかに踏み込むと、自慢の直列六気筒エンジンはさらにガソリンと空気を吸い込み、腹の中でそれに火をつける。すると私の愛車は一瞬、駆動輪である後輪側へ傾き、さらに加速を強めてゆく。

時刻は真夜中、空には星も見えそうだが。周囲に家はなく、ただ舗装道路の両側一面、どこまでも収穫前の田地が広がっている。前方にも後方にも、目障りな他の車はいない。対向車も無いので、市街地では普段使わない前照灯のハイビームに加え、フォグランプまで点けて平野を真ん中を突き進む。道路沿いに一定間隔に置かれた街路灯だけが私の行く先を示してくれている。暗闇に浮かび上がるその一筋の光点を目で追ってゆくと、まるで自分が航空機のパイロットにでもなったような感覚になってくる。夜の滑走路に機体を導くガイドランプのように、電柱の明かりは私と愛車を地の果てへと案内しているようだった。

車内には絞った音量で、ジャズのピアノ曲が流れ、助手席では友人がシートにもたれてうたた寝をはじめていた。快適なドライブだった。普段はこんなにとばせない。普段はこんなにリラックスして運転を楽しめない。最高のドライブ日和の夜だ。

田地の広がる前方に、ゆらめく街の灯が小さく見えてきた。街路灯は道路と一緒に愛車をその街へと導いている。

寝ていた友人が目を覚ました。彼は周囲を見回しあくびをする。

「悪い、つい寝ちゃったよ」

「うん」

私はハンドルを握って前を向いたまま相槌を打った。

「ちよっとお腹すかない？」

私は夕飯を食べていない事を思い出した。急に空腹に襲われる。もう少しこの快適なクルーズを楽しんでいた気持ちもあったが、そろそろ休憩が必要かもしれない。私は前を向いたままうなずいた。

「もう少し進むと市街地だ。あそこで何か食べよう」

前方には、暗黒の田畑の海に島のように浮ぶ街の灯が先程よりもはつきりと見えてきた。そして街の中心には、一際高い細身の高層ビルがまるで灯台のように建っていた。私はそのタワーをランドマークにして車を進めてゆく。道路脇の街灯もその街を目指して光の筋を作っていた。緩やかなカーブを曲がるたび、ランドマークとなったビルの灯りはフロントガラスの右端へ寄ったり左端へ寄ったりしたが、道路は間違いなくその街へと続いていた。

緩やかなカーブを繰り返しながらしばらく進む。さらに進む。ハンドルを手繰りながら、なおも進む。BGMのピアノ曲が終わり、続いてサックスの曲が流れ始めた。

私は妙な違和感を感じ始めた。気のせいだろうか……

「思ったより遠いね……あのビル、相当大きいんだね」

私がそう言うと、友人もうなずいた。

「ていうか、さっきからほとんど近づいている感じがしないな」

「え、やっぱりそう思う？」

私は驚いて、運転中だというのに横の友人へ顔を向けてうなずいた。最初見た時よりはずっとはつきりとその直立したビルの姿が見えているが、その後一向に近づいている気がしないのだ。街の灯りも同様で、景色に散りばめられた無数の光点が少しも大きくならない。

周囲は暗黒だ。一瞬私は、自分の車が停車しているのではないのかという馬鹿げた想像をした。だが、エンジンは快調に唸り、スピードメーターの針は時速七十五キロを示している。それに、道路左脇の街灯と道路のセンターラインは、さっきから幾本も前方から後方へと流れてゆく。愛車は確かに疾走していた。私は妙な居心地の悪さを感じはじめた。シートに押し付けていた背中やハンドルを握る手が少し汗ばんできた。アクセルを踏み込みさらに加速を強める。

スピードに合わせるように、街灯もセンターラインも勢いを増して後ろへ流れてゆく。

演奏時間十分弱のサックスの曲が終わり、車内にはエンジン音とタイヤの回る音だけが聞こえてくる。時速八十キロ。これ以上の加速は危険だ。

「ねえ、やつぱりおかしいよ。全然近づいてないよ」

私は狼狽気味に言った。友人も無言でうなずくだけだ。まるで、愛車と同じスピードであの街が遠くへ逃げていくようだった。私は薄気味悪く思い、適当なところで一度停車しようと思った。

「仕方ない、ここらで一休みしよう」

私がそう言った時だった。後方からハロゲンライトの青白いハイビームが愛車に浴びせられた。私は慌てた。後続車なんていなかったはずだ。後ろから光に照らされているのはわかったので、反射的にルームミラーへ目をやるが、不思議な事に後続車もハイビームの光源もミラーに映っていない。思わず肩越しに背後を振り返ると、何故かミラーに映っていないかった大型トラックが猛スピードで加速しながら愛車後部へと突っ込んできた。悲鳴をあげる間もなくガリガリッという空き缶の潰れるような音がして、猛烈な衝撃とともにコントロールを失った私達の車は八十キロ以上の速度で、真っ暗な水田へと突っ込み、天地逆さまに転覆した。

悲鳴のようにひいと息を吸い込みながら、一瞬で目が覚めた。まだ明け方だったが、夢の中でアクセルを踏み込んでいた右足がこむらがえりを起こし、苦痛の余り現実の世界で叫び声を上げた。

第三夜 深夜のドライブ（後書き）

下手の横好きとは全く私の為にあるような言葉で、私自身は結構な自動車好きなんです（決して詳しいわけではないです）、そのくせに運転が下手クソなんで、せっかくドライブに出かけても、駐車場で隣の車にぶつけやしないだろうか？ 無謀運転の車がこっちへ突っ込んでこないだろうか？とドキドキの連続です。時々、田舎道で前後に他車や人がいなくなるとホッとしたり。初心者なんて無茶はやらす、免許はキンキラですが、あればっかりは運転が上手い下手とは関係ないような……

きつとそんないつもの不安症が形を変えて出てきたのが今回のような夢なのかもしれません。決して辿り付けない街、砂漠の中に現れる蜃気楼のオアシスみたいな感じで、嫌な渴望感をもたらす後味の悪い夢でした。

そういえば、別の運転がらみの夢では「ドライブ中にパトカーに当て逃げされる」っていう、細かく再現するといろいろと問題がありそうな夢を見たことがあります……

第四夜 オン・ザ・ラテソル

四年程前、こんな夢を見た……

夜になると虫達が鳴きだす。季節によつてはそれが昼間よりうるさい事もあるが、今の時期は季節の変わり目で、気候も最も過ごしやすく、虫達の声もそれなりに穏やかな季節だった。

トタンでできた納屋から、粗末な背もたれ付きの木のイスを引っ張つてきた。納屋のそばにある、地面に長い鉄パイプを刺し、その上へコードを伸ばして電灯を据えただけの粗末な野外灯の真下へイスを置いた。

イスの横に黒いショットガンを立てかけ、私はそのイスに腰を下ろした。灯りに照らされたラテライト質の真つ赤な地面に、大きな黒い影がいくつか不規則な影をつくつて踊っている。私は頭上の野外灯を見上げた。真上ある野外灯の白熱電球に大きな蛾や羽虫が群がっていた。

家屋の方から家族が何やら文句を言っている。

——うんうん、判つてる。今夜はもう少し起きてないと。はいはい、もう寝てていいよ。大丈夫、虫除けは塗ったから。

家族は戸口へ引つ込み、家の電気が消えた。私は自分の腕に鼻を押し付けてみた。デイドを含んだ薬剤の臭いが鼻を突く。あと二時間ほどしたら、もう一度塗り直したほうがいいかもしれない。特に夜間、ここではマラリア対策が欠かせない。

風が吹き、私の眼前一面に植わったトオモロコシの葉がカサカサカサと音を立てる。私の背丈よりも大きく育ち、トウモロコシは収穫目前だ。今週中には収穫をはじめようと思った。

まだまだ夜は長い。私は足を組み、淡い緑の布で装丁された平凡社出版の本を開いた。書斎から持ってきたトマス・エドワード・ロ

レンス著「知恵の七柱」だ。

——今日はどこまで読めるだろう？

私はしおりを挟んだページを開く。それは著者のロレンス達一行がちょうどオスマン・トルコ占領下のアカバ港攻略に差し掛かったところだった。想像は時間も場所も、はるか遠くへと飛んでゆく。

どれくらい時間が経っただろうか。畑のずっと奥のほうで葉が力サカサカサと鳴った。私は顔を上げた。奥の方で、稲穂のようなトウモロコシの雄花がかすかに揺れたような気がした。しおりを挟んで本を閉じる。私は本を置き、ショットガンを掴んでゆつくりと立ち上がった。

——やっぱり来たか…… 今夜はヒヒかな？ それとも人間だろうか？

幸い、私も家族も今すぐに飢える心配はなかったが、残念ながら他人に作物をただで持っていかれて困らぬほど収穫があるわけではない。私はショットガンのフォアグリップを引いて弾を装填するとトウモロコシに当たaraぬよう、わずかに上を狙って発砲した。空に破裂音が響く。フォアグリップを引いて更にもう一発撃つ。

銃声の余韻が消え、再び虫の歌声だけが響き始めた。広いトオモロコシ畑にもう気配は無い。どうやら逃げていったようだ。昨日の夜もそうだった。

私は鼻から息を一吐きした。赤土の上に落ちたまだ温かいショットシエルの撃ガラを拾って、そばにあるクズカゴに放り込み、私は再びイスに腰掛けた。おそらく、もう今夜はやって来ないだろう。そんな気がした。

私は再び本を開き、第一次大戦下のはるか中東の砂漠へと思いを馳せる。夜は静かに更けてゆく。

第四夜 オン・ザ・ラテソル（後書き）

という、オチらしいオチのない夢でした。目覚めは非常に良かった記憶があります。この夢、個人的には非常に印象深い夢で、私の中ではいい夢として認識されています。

この夢には、夢の大前提となる『空気』というか『舞台設定』というか、その夢の中では明示こそされていないが、認識しているお約束みたいなものがあって、その上でこの夢を見るとなかなか面白い。

かいつまんでご説明すると、土壌や風土の関係から、舞台は恐らく日本でないことはすぐ判りました。遠い国のどこかです。私自身は、この風景は多分あの辺りの国だなと、大体わかっているのですが……

私は何らかの理由で、日本から家族を連れてかの土地で食う為に農業の真似事をはじめたようで、数年かかってなんとか飢えない程度になったようです。日本を出た理由は、あまり良い理由ではなかったような気がします。

夢の空気から伝わってくる限り、世界情勢は今以上に混迷しているようです。たまにワールドニュースで日本のことが伝えられると憂鬱になってテレビやラジオの電源切ってしまうという感じです。あまり良いニュースが入ってこないのでしょうか。

ただ、今いるこの赤い土地も、日本の現実の感性で考えると、決して住みよい土地ではないようです。自分の糧を自ら散弾銃で守らなければならないという、かなり剣呑な環境です。経済的にも社会的にもとても豊かとは言えない土地です。

何故わざわざ、そんなところへ家族総出で移住しなければならないのか、理由は私自身にも判りません。ただ、夢の中での私の精神は、なぜかとても安らかでした。あらゆる俗事から解放され、誰に依存する事もなく、逆に依存される事もなく、自身の判断と能

力だけが自身の生存を担保するという、苛酷だけれども非常に自由な心持でした。

虫の声、白熱球の色、トオモロコシの葉の揺れる音…… いまでも鮮やかに脳裏に浮ぶ、そんな夢でした。

P・S・ 家族にこの夢のことを話して聞かせたところ「あなたの、ケチなところと臆病なところがよくあらわれている」とのこと、アイタタタ……

エラそうに書いても、結局これが真実かもしれません。

第五夜 マイクロシーベルト・パー・アワー

今年の三月下旬、こんな夢を見た……

水で洗い流しやすいよう、普段使うズボンの上からツルツルした化繊のトレーニングパンツをはき、その上から雨合羽を羽織る。首元までしっかりとボタンを止めてから、合羽と首筋の隙間を少しでも埋める為、首にはタオルをきつく巻く。そして、最後に野球帽子を被った。

口元には、二重にした医療用マスクのつけ、マスクと口の間にぬらしたハンカチを幾重かに折りたたんだものを挟む。冷たくてとても不快だがしかたがない。玄関で身支度を整え、一度深呼吸する。

——これじゃ足りない。とても足りない……

私は意を決して玄関から家の外へと出た。外気になるべく入らぬよう素早くドアを閉めると、小型の放射線測定器のスイッチを入れた。

ジ、ジ、ジ、ジ、ジ、ジ……

測定器から耳障りなクリック音が鳴り出した。

不活性ガスが充填されたガイガーミューラー計数管を使用する、ある種の古い放射線測定器は「ジジジ……」もしくは「カリカリカリッ……」というクリック音の間隔や、その強さで線量の強弱を表す。私の手にした線量計も、いきなり耳障りな作動音を発し始めた。

覚悟はしていたが、それでも顔から血の気が引いてゆく。だからといって、事実から目を背けられないので、私は線量計を外の地面へと近づけた。

ジ、ジジ、ジジジジ、ジジジジジジジ……

測定器が喚き散らす。吐き気を催すようなクリック音が絶え間なく鳴り続ける。一秒でも長くここにいるべきではないのだろう。私は表示された数値を見るため、線量計の液晶画面を覗き込んだ。

どうしたことが、線量計の表示画面には何も数値が表示されない。スイッチが入っていないわけではない。その証拠に電離放射線を捉えた事を出す音は強くなってゆく一方だ。私は目を凝らして、何度も液晶画面に目を凝らす。瞬きして目を凝らす。

一体、この放射線量はいくつなのだろう。早くそれを把握しなければ。こうしている間にも微細な放射線が私の全身の細胞を焼いてゆく。液晶画面には何も映らない。でも、線量計は鳴り止まない。

ジジジジジジジジジジ……

場面は唐突に食卓へと転換した。食欲はない。湯気の立つ味噌汁を口に含むが、なぜかとても苦い。ご飯を口にするも、重金属のような味がする。私は箸を置き、ため息をついた。

ジ、ジ、ジ、ジ、ジ……

テーブルに置いてあった線量計が勝手に鳴り出した。わたしはぞつとしながらも、それを手にとる。相変わらず、液晶画面に数値は表示されない。

ジジジ、ジジジ、ジジジジ……

またも、音がやかましくなってきた。私は唐突に悪寒を感じ、自分の腹部に線量計を押し当てた。

ジジジジジジジジジジジジ……

音の間隔も回数も急増した。

そして、今まで線量計から発せられたと思っていた音が、味噌汁やご飯、箸からも聞こえはじめた。壁、窓、天井からもクリツク音が響く。そして一番大きく、はつきりとした音が他でもない私の腹の奥から聞こえてきた。

体内の放射能が私を内側から焼いていく。私を内と外、両面から焼
きつくすその音は、絶え間なくいつまでも鳴り響きつづけた。

第五夜 マイクロシーベルト・パー・アワー（後書き）

特に補足説明の必要もない夢ですね。見たままのストレートな夢でした。

『とある被曝のノイローゼ』とかいう題で小説書いたら人気出るかな？ …… ええ、大丈夫、もちろん書きません。というか、そんなの書けません……

えーと、現実世界の恐怖や不安というのは、たやすく夢の世界にまで侵入してくるもので、今回の夢もそのよい例だと思います。

今年の三月十二日、福島第一原発一号機の屋根が吹き飛んだ瞬間、私にとってこれまでで最大で、初めての「有事」が始まりました。

八方手を尽くしても線量計は手に入らず、家がどの程度汚染され、自分がどれほど被曝したのか全く判らず、とにかく状況を把握しなければと恐怖と不安の只中あつた時に見た夢です。どうやら夢の世界は自分の想像力を超えることはできないようで、数値が見えないという、現実世界のもどかしさがストレートに夢にまで再現される結果となりました。

元々、幼い頃から「放射能」「放射線」の恐ろしさというものは別格だと教わって育ってきた為（小さい頃にチェルノブイリが吹き飛んだ）、私自身は人より数倍、放射能には神経質な人間になりました。実際これまで、ドキュメンタリーや映画で放射線測定シーンが出るたび、「あのような環境や製品は自分と関係があつてはいけない世界のもの」という忌避感を抱きながら見ていました。それがあるうにか……

最近のガイガーカウンターは放射線を検知すると、クリック音ではなく電子音のブザーで鳴るものが多く、クリック音を発する製品はあまり見ません。夢の中で放射線の音が、テレビや映画で聞いたそのままの、「近くで決して聞いてはいけない音」であるクリック音だったところが、私の恐怖と単純さをよくあらわしているような

気がします。

ある学者が、放射能災害は人の肉体だけでなく、その恐怖や不安が精神をも蝕むから、心配のし過ぎにも注意が必要とのコメントをしていました。物理的な被曝への注意はあたりまえですが、こんな夢を見ている私は精神面でも注意した方がよいなと思いましたね。

事故から四カ月後、線量計を入手でき、ある程度信頼できる数値も判り、幸運なことに即引越さなければならぬ状況ではないと判りました。

ただ、これまで経験した事がないくらいの外・内被曝をしたことは確かなので、最近ガン保険の値段を調べ始めたのは真面目なお話です。

第六夜 リアルにあった充実感

一月ほど前、こんな甘い夢を見た……

——第一艦隊がヤバイ。なんとかしないとやられる……

画面上を恐ろしいスピードで走ってゆく各艦隊からの通信文を読んでみるが、今の私には、とてもそれを理解して対処する余裕はない。もう間もなく空襲される……

よく晴れた秋の午後。スーパーファミコンの2コンを握っている、若草色のワンピースを着た、小学校の高学年くらいの女の子がつまらなそうにあくびした。

「こっちの攻撃はまだなの？」

1コンを手に行っている私（どうもこの夢では、私も女の子と同じ年齢のようだ）にとっては、相手の攻撃ターンなどずっと来ない方がいいのだが、当然コマンドの処理が終われば攻撃は始まってしまう。突然の勇ましい海戦のマーチと共に、テレビの画面は太平洋の地図から、大小様々な船を模したアイコン並ぶ戦闘画面へと変わってしまった。私の軍の茶色の艦隊から少し離れたところに青い色のプロペラ飛行機のアイコンが見える。2コンの彼女が送り込んだ雷爆隊だ……

「やったあ！ やつときた」

彼女は嬉しそうにコントローラーを握ると画面上のカーソルを操って、私の艦隊の真ん中にある海に弁当箱を浮かべたようなアイコンを選んだ。私の艦隊の正規空母である……

「はずせ、はずすんだ！」

テレビにそう念じる私の声も虚しく、飛行機が航空魚雷を落すアニメーションと共に海の上の『弁当箱』が火を吹いた。

「やったー！ よし次〜」

こちらの対空砲火をもとめせず、女の子の雷爆隊は次に戦艦を餌

食にする。アイコンに火がついたので、私はすかさず消化のコマンドを選択するが、あえなく「鎮火に失敗」との文字が出た。この艦ももう駄目だ……

そんな時玄関から音がして、2コンの女の子よりやや年上の、セーラー服姿の女の子が居間へと入ってきた。

「あ、お姉ちゃんお帰りー」

2コンの女の子が声を掛ける。彼女のお姉さんらしい。

「どうも、お邪魔してます」

「いーえー、ごゆっくり。ねえ、今どっちが勝ってるの？」

お姉さんは私の女の子の間に座り、身を乗り出してテレビを凝視する。太平洋戦争モノのシミュレーションゲームに興味を持つあたり、この姉妹、なかなか変わり者らしい。

「……こっちのボロ負けです」

私が恥ずかしそうに言うとお姉さんは笑って妹の肩を叩いた。

「へえ、あんた強いんだねー」

そうこうしている間に、こっちの大きな船はことごとくやられてしまい、第一艦隊は潰滅した。

「やったー、楽勝」

コテンパンにやられ、返す言葉も無い。

お姉さんの飛び入り参加の為、シミュレーションを切り上げ、レースゲームや格闘ゲームを交代で対戦する事になったのだが、このあたりはリアル世界をトレースしているようで、実際にゲームが下手くそだった私は夢の中でも下手くそなままだった。結局、私はどのゲームでもこの二人に勝てなかった……

外の日が傾いてきた頃、急に妹の女の子が壁の時計を指さした。

「ねえねえ、そろそろ行かないと。エアガンを見に行くんじゃないかっただ？」

……どうやらそういう事になっていたらしい。この子、エアガンに興味があるらしく、ホビーショップまで連れて行く約束をしていたようだ。この子、本当に変わってるよな…… 私はうなずき二人で

立ち上がると、お姉さんもハイハイ！と手を上げた。

「ねえわたしも行きたい！ 前から一度ああいうの撃ってみたかったの」

——……マジで？

ここまでくると、私も心中で苦笑いしはじめる。いろいろと出来過ぎだ。だが、幸いにも私にはここが夢という自覚が無かったので、この世界はスピードを落さずノリ続ける。

「えー、お姉ちゃんも来るの？」

妹の方が面倒そうな顔をしてお姉さんの顔を見る。

「いいじゃん。ねえ行こうよ」

「じゃあ皆で行きましょう。皆で、ね？ 自転車ですぐだし」

私はそう言ってスーパーファミコンのリセットボタンを押しながら電源を切る。

そうして、私達は和気あいあいと玄関で靴を履き始め……

束の間の楽しい夢は終わり、朝がきた…… 久しく感じた事のない開放感と、なぜか一抹の寂しさを感じさせる夢だった。

第六夜 リアルにあった充実感（後書き）

今回はこれまで以上に読者様置いてきぼりで、一見するとかなりご都合主義的とアニメチックな願望丸出しな痛い夢です。でも、私自身にはそう簡単に切り捨てられない夢でした。

今回、夢に登場した女の子とそのお姉さんは架空の人で、現実世界で会ったことはありません。ただ、実際に私は小学校の頃、同級生の女の子達とよくスーパーファミコン版『提督の決断』をルールが良く理解しないまま対戦していました。この夢のなかでやっていたゲームもそれです。

やりたいゲームを交代でやっていて、彼女達はいつもファイナルファンタジー5（あの頃はファイファンって呼んでた）をやりたいがっついていましたね。

今思うと、あの頃の私はクラス内でもかなりの『リア充』でした。男女関係無く、仲の良い友達四人くらいで集まってゲームをやったり、公園で缶蹴りをしたり、時にはグループでスケートに行った事もありました。

年頃が年頃だけに、イチヤついてるとか陰口言う者も居たけれど、仲間内にはそんな色気付いた感覚はまだなく、変な意識をすることもなく楽しく遊んでいました。まだ小さかったので、さすがにエアガンまでは買いませんでしたが……

その後、私は引越しの為に転校することになり、そのグループとはそれっきりになってしまいました。時折当時の愛すべき仲間達がその後どんな人生を歩んでいるのか想像する事があります。特に女の子達なんかは、今ではかなり綺麗な人になっているのでは？なんて想像します。今はどこでどう過ごしているのか判りませんが、元気でいてほしいと思います。

あの頃は先の事や、面倒な事は考えずに済みました。その時を生きていればそれが許された時でした。夢の中の私も当時の私も、憂

いも心配も見栄も無く、全く無邪気なもので、ある意味では最高のリア充な状態だったと思います。そして、起きなければならぬ朝が来ることや、今後、自分が大人になってしまふことをまったく心配せずに済んでいました。

もし今、神様や天使みたいなのが目の前にあらわれ、今すぐビルから飛び降りたらお前をあゝの時代へ帰してやると言っただけなら……ちゃんとした保証さえくれるなら、私は今すぐ飛び降りるでしょう。

第七夜 峠の宿

去年の秋、こんな夢を見た……

友人の運転する車の助手席から、私は山並へと沈む夕日を眺めていた。深い森の間を蛇行する峠道を降りてゆく。スキー旅行の帰り道とあって、ゲレンデで酷使した体は重くシートに沈み込む。ついうつかりすると居眠りをしてしまいそうになるので、私は極力外を眺めながら、運転している友人とゲレンデのことをあれこれと話していた。

あの斜面は急だったが、慣れると面白い…… 無謀なちびっこスキーヤーがわきをすり抜けて行つたので、避けたら派手に転んでしまった…… 山頂の眺めはとても素晴らしい…… などなど。

日が沈み、夕焼け空がどんどん暗くなってゆく。ジグザグの急勾配な下り道を、友人はエンジンブレーキを使って上手にカーブをこなしながら降りてゆく。

「もう三十分もすれば着くよ」

友人が言った。くたくたになるまでスキーで遊び倒した後、長距離を運転して帰るのは危ないので、私達はゲレンデに近い温泉町で一泊して帰る予定を立てていた。空の夕焼けがどんどん夕闇に移ってなか、車は小さな温泉町へとさしかかる。

舗装されたばかり真新しい道路の両脇に小さな旅館や商店が並んでいる。それらの建物もみな小奇麗で真新しい感じがする。まだ出来て間もない温泉街のようで、私達の他には道路に車も無く、歩道にも人の往来は無い。十数台も止めれば一杯になってしまいそうな共同駐車場に車を止め、私達は旅行鞆を担いで宿まで歩き出した。もう空は真っ暗で、道の両側にある旅館や食堂の看板には灯りがつき、厨房や風呂場の換気扇からはもうもうと湯気が立ち上っていた。街路はおそろしく静かで誰も歩いていない。整備されているが全く

活気が感じられない温泉町だ。

私達は道路沿いの歩道を五分ばかり歩き、予約してある目当ての宿へとやってきた。間口は決して広くないが、背後の下り斜面に沿って奥行きがかなり広そうな旅館で、奥のほうからは露天風呂だろつか、ひんやりした大気へ白い湯気があがっている。数段のひな壇を上がりガラス張りの引き戸を空けて玄關へと入ると、板張りの広いロビーとなっている。新しい旅館のはずなのだが、なんと昭和臭のきつい内装だ。どこの田舎の旅館にもありそうな大木の切り株の調度品や、何やら読めない達筆を記した屏風の衝立、山水画の掛け軸などが飾ってある。私達はスリッパへと履き替え、板張りのロビーへと上がり、真ん中に据えられたソファーの上へ荷物を乗せた。「誰もいないのか？」

友人は申し訳程度に置かれたフロントの机の上にある呼び鈴を押した。

私はお決まりの調度品をなんとなしに眺めならロビーを歩き回った。広いロビーの隅で私はぎょつとして脚を止めた。一・五メートルくらいの長い台座に置かれたそれは大きな口をあけて私を見張っていた。ピンと上へ立った大きな耳、長く前へ伸びた吻が分かれ、広く裂けた口から真っ赤な舌とやや黄ばんだ大きな牙を見せつけている。茶色い毛並みは艶やかに蛍光灯光を反射し、それぞれが今にも逆立ちそうな勢いだ。大きな頭を横に向け、鋭い眼が二つ、光を反射させてじつと私を見ていた。そこには、まるで鹿と同じくらいありそうな赤犬の剥製が飾られていた。

「……恐いなあ」

友人が側へやってきた。

「何これ？ オオカミ？」

私は首を振った。確かに普通の犬の大きさではないが、以前に博物館の陳列棚で見た二ホンオオカミの剥製とは全く違う生き物だ。

「いや違う。吻が長いし、耳も尖がってる。それに毛の色がオオカミよりずっと赤い…… オオカミじゃないだろ」

私は剥製の横に置かれた、煤けた木の立札に気がついた。

「昭和三年 九月二十五日 山犬峠だつて」

「へえ…… 大昔じゃん」

奥のほうから足音がして、ワイシャツ、ネクタイに半被という、お決まりのスタイルの旅館の番頭がロビーへと姿をあらわした。

「お待たせしてしまつて、申し訳ありません。ようこそいらつしやいました」

その中年の男は頭を下げながらフロントで宿泊台帳を開く。友人が記入をはじめたので、私はその立派な赤犬の剥製へと視線を戻した。
——それにしてもでかいな。外でこんなのに出くわしたら、ひとたまりもないな

私はそう思いながらその犬の目を見つめた。

かなり古いものだが、それはよくできた剥製に見えた。動物を剥製にした場合、その眼球だけは生前の姿を留める事は出来ない。替わりに良く似た色のガラスのビーズをはめ込んで眼とする。ただ、この犬の、黒真珠に金箔で虹彩をかたどつたような鋭いビーズの目は非常にリアルで臨場感に富むものだった。その眼には未だ潤いを湛え、今にも瞬きしそうだ。

「えっ……」

剥製と睨めっこしながらそう感心していた私は次の瞬間、思わず息を飲んで手にした鞆を落としてしまった。それまで真円に近かつた犬の瞳孔が、まるで獲物を見据えるかのように小さな楕円形に形を変えて私を睨みつけたからだ。完全に眼が合ってしまった私は、心臓が凍るような動悸を感じた。ガラス細工でできているはずの犬の目が形を変えるわけが無い。私は思わず半歩飛び退いた。

「おい、行くぞ。どうした？」

受付けの記入を終えた友人が鞆を手にこつちへやってきた。私は再度犬の眼球を見た。不思議な事に、犬の瞳孔は何事もなかったかのように丸いまま、虚空を見つめている。

——え、今のは何だ？

「今、眼が動いたような気がした……」

「はあ？ 何？」

友人が聞き返すので、私は首を振った。話してもおかしい奴だと思われるだけだろう。

「いいや、何でもない……」

そう言つて私は狼狽を隠しながら、鞆を拾った。

「こちら、ご案内いたします」

私達は番頭に案内されて旅館の奥のほうへと歩いていった。

私達は和室へと案内された。畳敷きに卓が置かれたありきたりの客室だ。とりあえず畳に腰をおろし、荷物を解き始めた。急に強い疲労感に襲われ、体が重くなったような気がした。腕時計を見る。外は真つ暗だが、まだ夕食まで時間があつた。

「先に風呂に入ろうか？」

友人もうなずき、私達は支度をはじめた。

「やべえ、洗面道具を車に置いてきちゃった。取つて来るから先行つてていいよ」

友人が慌ててオーバーを羽織ながらそう言つので、私は了解した。

「じゃあ先に入ってるよ」

私達はひんやりとした廊下へ出ると、そこで別れた。先の番頭によれば、風呂はさらに建物の奥の方にあるらしい。私は着替えや浴衣を抱えて、スリッパをペタペタ鳴らしながらリノリウムの床を奥へと進んだ。私達以外、他の泊まり客が全くいないのか、廊下は異様に静かで誰ともすれ違わなかった。特に具体的な不満があるわけではないが、ロビーの悪趣味な置物といい、この陰気くさい雰囲気といい、私はこの宿にあまり居心地の良さを感じていなかった。

——あの犬は気持ち悪かつたなあ…… うっかり眼を合わせてしまったよ

長い廊下を突き当たりまで進み、下り傾斜の渡り廊下の先に別の棟が建つていた。浴場はそこにあるらしい。その方角から三味線だ

か琴だかの音楽と大勢が会食している賑やかな声が聞こえてきた。どうやらそこには宴会場もあるようだ。泊り客が自分達だけでなかったことに安心し、私はやや足取り軽く、大浴場へとやってきた。

安心はしたものの、新しいくせに陰鬱なこの旅館の雰囲気は風呂場でも変わらず、脱衣所の蛍光灯はチカチカと明滅するお化け電球状態で、風呂場のほうも薄暗い。

「蛍光灯のチエックくらいしてよ……」

私は脱いだ服を籠に押し込むとガラス戸を開けて風呂場へ行った。思ったとおり浴室には誰もいないが、のんびり湯につかれそうだ。そこは半露天風呂となっていた。体が冷えてきてしまうので、私はいそいそと体を洗うと、湯に体を沈めた。すぐ近くでは、先の宴会場から音楽や食器の音が聞こえてくる。空を見上げてみた。薄雲がかかっているのか、星も月も全く見えなかった。何故だろう、お湯に包まれているのに、冷え切った体の芯が熱でほぐされてゆくような感覚が全く無い。何故だか寒さすら感じる。確かに、お湯は温かい筈なのに……

そのとき、脱衣所のくもりガラス越しに何か影が映ったような気がした。友人が来たのかと思って顔を向ける。脱衣所は先の蛍光灯のせいで不規則に明るくなったり暗くなったりを繰り返している。

「遅かったな」

私はガラス越しにそう声をかけたが、返答は無い。脱衣所の蛍光灯がまた明滅したとき、一瞬だけ、大きな四つんばいの黒い影がガラスに映った。

——何あれ？

私はメガネを脱衣籠に置いてきていたので、目を細めて脱衣所のガラス戸を見た。ふたたび脱衣所が明るくなると、はっきりした影がガラス戸の右端から左端へと歩き、ターンして再び右端の壁の陰へと消えた。長い吻、突き立った両耳、小さな熊かと思われるくらいのおおきさの生き物の姿だった。ロビーの剥製を思い出したのはいうまでもない。

ハッハッハッ…… ハッハッハッハッ……

荒い動物の息遣いがガラス越しに聞こえてくる。私は歯をガチガチと鳴らして身震いを始めた。湯の中にいるというのに全身が鳥肌たつてきた。私は助けを呼ぼうと露天風呂の外へと体を乗り出した。すぐ近くには宴会場もあり、ここから叫べば誰かが来てくれるだろう。私は声を出そうとして異変に気付いた。さっきまで聞こえていた宴会場のにぎやかな喧騒がいつのまにか全く聞こえない。私は思わず自分の耳に手を当てた。旅館の屋外灯も宴会場の窓から障子越しこぼれる明かりも全く変わりにないのに、人々の存在を示す物音が全く聞こえなくなっている。聞こえてくるのは、背後の脱衣所から漏れる猛獣の息だけだった。

浴槽にいた私は背後を振り返った。その猛獣は足を止め、大きな頭をこちらへ向け黄色く光る両目で私を凝視していた。大きさといい、姿形といい、赤茶色の毛並みといい、それは間違いなくロビーで見た山犬の影そのものだった。

山犬が喉を音を鳴らした。それは苛立ちをあらわす猛獣特有の唸り声だった。私とその猛獣を隔てているのはガラス戸一枚だけだ。私は恐怖と猛烈な寒気を感じガタガタと震える。曇りガラス越しに私は犬の黄色い両目を凝視し、犬も私を睨み続けていた。

何秒ぐらいそうやっていただろうか、再び脱衣所の照明が点滅をはじめ、山犬の影が見えなくなると、遠くからまるで聴力が蘇ってくるように宴会場のへたくそなカラオケの歌声やざわつく音が聞こえてくるようになった。脱衣所の電気が再び点灯すると、山犬の影は消えていた。私は湯船の真ん中で息を殺したまま身動きできなかった。明るくなった脱衣所に人影が見え、タオルを腰に巻いた友人がガラス戸を開けて浴場へと入ってきた。

「さーで、ゆっくり温まるうかねー、湯加減どう？」

私は目を丸くしたまま、言葉を発することができなかった。

「なんかあったの？ 今にも凍死しそうな顔してるよ。お湯ぬるいのか？」

きつと死人のように青ざめた顔をしていたのだろう、少しほっとした私はやつとのことですなずいた。

「なんか、体が温まらなくてね……」

今あったことを話しても、とても信じてもらえそうもないので、私は冷たい湯につかったままじっとしていた。なぜか友人が来て以来、脱衣所の蛍光灯はさっきのように明滅せずに明るく光り続けている。私は寒さと嫌な違和感から身震いしながら友人が湯から上がるのを待った。もう、ここで一人になるのが怖かったのだ。

友人がもう上がるうというので、私たちは冷たい外気から逃げるように脱衣所へと引つ込んだ。私は黙って大犬がいた形跡を探そうと周りを見たが、異変はない。とにかく急いで服を着こんで私はそこから立ち去りたかった。友人は部屋から持ってきた浴衣に袖をとおしたが、私は何かあってもすぐ動けるよう、着てきた洋服をまた着ることにした。

眼鏡をかけ、寒いので靴下を履こうとした時だった。濡れていた足の裏に何か繊維の束のような埃が張り付いていた。髪の毛のような気持ち悪いが赤毛が数本、足の裏にくっついていていた。私は恐る恐るそれをつまんで蛍光灯にかざした。柔軟だが芯のある動物の毛だった。あの大きな赤犬を連想した事はいうまでもない。

「なんか、きつたねーな、ここ。俺の足にもくっついてる」

友人が左足を持ち上げて自分の足の裏についた毛を払った。私は安堵感と恐怖感に同時に襲われ、やや混乱気味についさっきここで起こった事を説明した。

夢の中という補正があるとはいえ、ひどく取り乱して話す私を友人は呆れるか笑うかするだろうと思ったのだが、意外にも友人は落ち着いてわたしの言葉を聞いてくれた。

「とにかくここは嫌だ！ 今すぐここを出よう！」

こんな無茶な要求を友人はなぜか快諾した。

「わかった、わかった。とりあえず荷物取ってこよう」

私達は薄暗い廊下を足早に部屋まで戻り、急いで荷物をまとめ始めた。実際のところ、やたら慌てて荷造りする私に比べて、何も見えない友人はずいぶんとのんびりした様子だったが、なんとか二十分後には私達はオーバーを羽織って部屋をあとにした。途中、宿の従業員に急遽発つことにする旨伝えようとしたが、例によって誰もいない。いないなら仕方ない。とにかく薄暗い廊下を荷物をかっいで小走りに私達は建物横の通用口から外へと飛び出した。どうしても剥製のあるロビーは通りたくなかったのだ。一瞬にして体が冷えてゆくのが判る。

すぐに舗装された正面の道路へと出て私は少し安堵した。相変わらず人と車の往来は全くない気持ちの悪い温泉町である。とにかくここから一刻も早く立ち去りたかったので、私は急ぎ足で駐車場へと急いだ。荒い息が吐くたびに白く湯気を作る。自分の息づかいとさっきの犬の息の音が似ているような気がして、思い出すと心臓が凍りそうになる。汗をかいたシャツが急激に冷えて背中に張り付いた。そんな私の背中を呆れた様子で見ながら友人がのっそりと歩いてくる。

「そんな慌てるなよー」

ようやく車へとたどり着き、友人がキーを取り出すためポケットへと手をつっ込んだ。ごそそとジャンパーやズボンのポケットを探る友人を見て、私は嫌な予感がしてきた。

「あれ？ 無い……」

——お前、ふざけんなよ！

思わず怒鳴りそうになるのをすんでのところでこらえる。客観的に考えて、ふざけたことをやっているのは間違いなく私の方だ。

「ちよつと見てくる」

「い、急いで頼むよ」

私は恐怖のためにかなり苛々しながらもなんとか平静を保ってそう答えた。

「判ってるって」

友人は旅行鞆を地面に下ろすと、のんびりした様子で旅館の方へと歩いて行く。

——走れよ！

私は言葉を腹に飲み込む。

一人になり私はさらに寒けを感じてきた。その場で足踏みしながら友人を待つ。冷たい強い風が道を吹き抜けた。刺すような冷たさだ。山々の木々がザワザワと不吉な音を立てる。私は一人になったことを後悔し始めた。一秒一秒が異様に長く感じられる。

風の音に混じって長く澄んだ遠吠えの音が聞こえてきたのはそんな時だった。町の背後の大きな影となっている山腹から何度も。それは間違いなく犬の遠吠えだった。自分の顔から血の気が引いてゆくのが判る。

そして、友人はいつまでたっても戻ってこない……

そうしているうちに目が覚めた。ベッドから布団が落ちてひどく寒そうにしている自分がいた……

第七夜 峠の宿（後書き）

どうも、おかげさまで夢十夜も七夜目です。この夢、本人はとても怖がつて見た夢なんですが、文章にするとなぜかぜんぜん怖くない。ホラーとか怪談系はやはり難しいですね。とりあえず、怖い夢系はこれで最後です。もともとは怪談系短編のネタに使うかと思っっていました、一捻りあるいいオチが思いつかなかった、そのままで使うことにしました。

それにしても「ツキノワグマ」の時と同じく剥製が動く夢が多いな…… 似たような夢はほかにもいくつか見えています。ワニとかホオジロザメとか……

今回ほど緻密な夢じゃないですが、小学校のプールになぜかクロコダイルの剥製が沈んで、そのプールで普通に水泳の授業が始まるという力オスな設定、その後はやっぱり動きだすんですよ、ワニが。あとはお決まりの展開でプールの水がどんどん赤くなってく……

ただ博物館で剥製を見るたび、思うんですよ。こいつは生前どんな風に生きていたんだろうかと。美しい毛並みや羽なんかは生前の様子をある程度保存できますが、目だけはどうしても作り物感が出てしまいます。昔、小学生のころお粗末な昆虫標本を作ってみた事があります、あれもそうでした。目だけはどうしても変色してしまい生前の透明感が失われましたね。

逆に博物館なんかで目の再現がよくなった動物標本があつたら、ちよつと恐怖を感じるかもしれません。

第八夜 全校スピーチ

大学生の頃、こんな夢を見た。

体育館のステージでは校長先生が何やらお言葉を述べているが、私達の耳には入らない。とてもそんな余裕がないのだ。落ち着かない……そして、じれったい。

体育館のステージわきに設けられた控え室。粗末な合板の壁に囲まれた部屋の中央には折り畳み机とパイプ椅子が据えられ、私はそこに座って発表原稿のチェックをしていた。これから全校生徒の前で、今学期の生徒会誌編集委員会の活動報告をする予定になっていた。とにかく失敗が無いよう、念入りに原稿をチェックする。

私の斜め向かいには、同じく原稿のメモに目を落とす女子生徒が座っていた。服装は白い半そでブラウスに紺のスカート。髪はセミロングのストレートで肩まで届き、やや赤みの入ったブラウンに染められている。私が彼女を見ると彼女は顔を上げ、シルバーのワイヤーフレームメガネのレンズ越しに私と視線を合わせた。私は照れて、細面の顔から視線を逸らして言った。

「緊張する？」

「どうか……」

彼女はそう言っ、真剣な表情で再びメモへと視線を落とした。私は彼女の落ち着いた様子に感心しながら、腕時計を覗く。心臓の鼓動が早くなる。はやく役目を終えて、ここを去らないと……ここに長居はできないんだ。

校長先生のお話がようやく終わり、やる気のない緩慢な拍手の音がする。そういえば、彼女は何の委員だったんだろう？

「そういえば、君は何委員だったわけ？」

「私は保健委員だよ」

私はうなずいた。

「そうだったね。そちらが先にやっていいよ。絶対その方がいい」
今は彼女の仕事の方が私の仕事より優先されるべきだ。彼女の仕事には人命がかかっている。彼女はちょっと驚いた様子だったが、かすかな笑みを浮かべ、ありがとうと言った。素直に、ずっと見ていたい綺麗な顔だなと思った。

彼女はステージへと上がった。私は、自分の仕事が終わったらすぐに動けるよう体育館を出て、下足箱の横に束で置かれた長方形のチケットを二枚取った。体育館へと戻ると、教職員や生徒達は相変わらず、興味無さそうに彼女の報告と伝達事項を聞いていた。いつもと変わらないその落ち着いた、悪く言えば危機感の無い態度にちよつと驚く。私達にはもう時間がないはずだ……

「……それでは怪我した人や体調の悪い人から、校庭のトラックに乗ってください」

彼女は最後にそう締めくり、その仕事を終える。館内が少しだけざわついた。

控え室に戻ると、彼女がステージから戻ってきた。

「お疲れ様、さあ早く行ったほうがいいよ」

私はそう言って彼女にチケットの一枚を渡した。汽車の一等客車のチケットだ。どこの列車のチケットなのか私自身よく判っていないが、それはあまり重要ではない。とにかく、この汽車が最終で、どうしても乗らなくてはならない。そして、もしも乗り遅れたら後はない。もし乗り遅れたら……

「どうもありがとう。ごめん、じゃあ先に行くね」

「うん、じゃあまたね」

彼女も、またねという声を私に返してくれた。そうしてこちらを振り返りつつ、体育館から渡り廊下の方へと去っていった。

残った私は委員会の報告を行うべく、控え室からステージへと向かう階段に足をかけた。振り返ると、控え室の小さい窓から青い空が見える。まさにその時、遠方の八十八ミリ砲の砲声が大気を振るわせた。間を置いて、更に二発。

——ついに来たか！

もう間もなくここもドイツ軍の手に落ちる。ようやく体育館で整列していた連中も慌て出した。私は自分のチケットを強く握り締めて階段を登る。ドイツ軍が攻めてくる前に、仕事を終え、彼女が待つ列車まで走らなければ。間に合う保証はない。緊張と焦りで、心臓が鼓動が早鐘のように鳴る。

だが、もっとも雰囲気盛り上がってきたところへ急に、自分がデタラメな夢の世界にいるのではないかという嫌な自覚が出てきた。ドラマチックという麻酔の効力が急激に萎んでいく。待ってくれ！これが夢なんて……この充実感と悲壮感溢れるイカれた世界が夢なんて、あまりにも、あまりにも悲しすぎる。

私は夢のストーリーを無理矢理切り開こうと、ステージの上で原稿を開き、編集委員会の年間報告を読み上げようとしたが、さつきまで字で埋まっていたはずの原稿は真っ白になっていた。まだ起きてはいけない。まだ目覚めてはいけない。もう一度彼女に会うまでは……

抵抗も虚しく、視界は唐突に暗転し、私は目覚し時計の電子音によって朝というもう一つの世界へと引きずり出されてしまった。

色んな意味で、泣きそうになってしまったのはいうまでも無い……

…

第八夜 全校スピーチ（後書き）

「カサブランカ」っていう映画はもう百回以上見ていますが、なにか？ そういえば、ドラえもんの道具にはドラマチックガスっていうものがあるんですよ。あれを使った状況に似ているかもしれない。

この夢についてはあまり多くをコメントしない方がいいかもしれませんが、私本人は至ってまじめな意識でこの夢の世界を生きていました。問題は、この夢を二十歳もとうに過ぎたいい大人が見ているということ…… 弁解のしようがないな……

ちなみに、高校時代は本当に生徒会誌の編集委員をやっていて、それなりに楽しく委員会活動してました。全校の前での報告も実際にあったことで、とても緊張しましたがなんとか無難に済ませられた事を思い出します。

ええと、この麗しの保健委員ですが、高校時代にこのような方は残念ながら存在しませんでした。この『ワイヤーフレームの君』は一体どこから現れた人物なのか、私にも判りません。

この後、この夢の続きがどうしても見たくてならなかったのですが、数日後、なんと夢の中で私は彼女と再会することができました。そのお話は、次の夜に……

第九話 ナイアガラ・フォールズ

前夜の夢から数日後、こんな夢を見た……

水の流れ落ちる轟音以外何も聞こえない。霧状になった水は甲板にいる私達のところにも降ってくる。世界三大瀑布の一つ、ナイアガラの滝。

その圧倒的な量の水の壁を、私達は古風な外輪船の上甲板から無言で見詰めていた。甲板の柵に寄りかかりながら連れの相棒を見ると、何を思っているのか彼女はまるで放心したような目つきで、その水の断崖を見つめていた。服装は高校の制服ではなく厚手のレインコートに変わっていたが、間違いなく数日前に夢で出会った女性だ。

——ゆ、夢の続きか？

無論、心中でガッツポーズをとる。と同時に、夢特有の舞台設定の補正がかかり、前夜の夢と今夜までの間に、私にとって都合のよい冒険譚の記憶が脳裏に挿入される。

前夜の夢の後、ギリギリでファシストの侵攻を逃れた私達は世界中で様々な冒険をくぐり抜けて、今ようやくこの北アメリカで一時の安息を得た……らしい。ある時は針葉樹林帯の国境線を越えるために、雪に足をとられながら走ったり、またある時は乾燥した山岳地帯の崖で、迫りくるM i l - 24ハインドへ向けスティングラー・ミサイルをのトリガーを引きしほり……

私達は（デタラメな）記憶を反芻しながら、じっと滝を見つめていた。今はまさしくハリウッドの二時間映画の最後の五分間。なんの物語の必然性もなく、最後はクスしてエンドロールとなる状況だ。彼女は眼鏡のレンズに霧状の水滴が付くのも構わず、無言で滝を見つめている。私は滝や風景より、彼女のその伶俐な横顔に魅了されていた。冒険中の彼女はとても賢く勇敢だった……という設定に

なっている。

「いろいろあつたね……」

滝にかかる虹をみながらつぶやくと、彼女はそうねと言った。私は大切な事を伝えるのは今しかないと思った。私は現実世界の自分では到底考えられない、毅然とした心持で彼女に向かった。

「僕は…… 貴女を愛している」

夢の中では大胆なもので、こういう言葉がなんの躊躇いもなく飛び出す。そして私は相手の反応を待った。

「……そう」

彼女はそう返事をしたきり、虚ろな表情のまま、ただ水の壁を見つめている。

「私も……」

『私も』とくれば続く言葉はもう決まったようなものだ。固唾を飲んで返答を待っている私をよそに、彼女は何かを思い出すようなふうに小声で言った。

「君を…… 愛してるかもしれない」

私には自分の顔と右まぶたが痙攣するのがわかった。

——か、かもしれない……

どうやら、夢の世界であつても何から何まで上手く事が運ぶわけではないらしい。むしろ、夢とはつきり自覚している場合であつてさえも、ストーリーや設定が制御不能なことが多い。どうやら今回もそのようだった。

必死で落胆を隠そうとしながらも、その返答にどう反応すべきかわからず口を半開きにして戸惑う私に一瞥もくれず、彼女はふと思いついたように笑うと、はじめて私の方を向いた。眼鏡のレンズ越しに深く黒い眼が私の目を覗き込んでくる。

「ねえ、今度は南の方へ行ってみない？」

「え？ そう？ み、南ね…… 南、うん、それでいいよ」

まるで先のやりとりなんて無かったように彼女が言うので、私は慌てて同意した。どうやらこれから、夢の世界では南の方角へ旅する

事になるらしい。

すると、遊覧船がもう間もなく棧橋に接岸すること、周囲の乗客が下甲板に降りる準備をはじめた。すると彼女はおもむろに片腕をこちらへと突き出す。それがエスコートの催促だと気付くまでに少し遅れ、私は慌てて自分の右腕を差し出した。

私の腕に彼女は自分の腕を軽くからめ、私達は並んでアルミ製の乗船橋を降りはじめた。彼女の体温を腕に感じながら、私は背後の湖へ轟々と流れ落ちる滝を振り返った。

——何事も願うようには転ばない。それが夢の中だってね……
そう思いながら、乗船橋から木製の棧橋に降り立ったところで夢の世界はかすんで消えていった。

そしてぱちりと目が覚めた。なぜか寝起きは悪くない。夢の記憶は鮮明。

一人、思わず苦笑いしてしまう明け方だった。

第九話 ナイアガラ・フォールズ（後書き）

「愛してる」だって…… 普通こんな言葉、口に出して言わないですよ？ 言わないですよ？（念押し）

私はまず言いません。言う機会ありません。そういえば、何度かニンテンドーDSに向かってだけは言った事ありますけど。（マイクに「愛してる」って言わないと先に進めない妙なゲームがあるんですよ）

前夜に続き、麗しの『ワイヤーフレームの君』の再登場でした。ちなみに、この夢もやはり映画の影響を受けているらしく、おそらく夢の元ネタになったのはケビン・コスナー主演「ワイアット・アープ」のエンディング・シーンと思われます。ただ、なぜ場所がアラスカじゃなくてナイアガラの滝なのかは判りません。（別にこの映画が好きというわけではない。良いと思ったのはメインテーマ曲とOKコラルの決闘シーンくらい）

本題に戻ります。何事も不完全燃焼、もしくは不燃。どうも自分の人生にはついてまわるようです。

後に冷静になってみれば、成功体験の無い分野で成功の甘さをリアルに夢でシミュレーション出来るわけもない事に気づきました。

『夢』も決して万能の娯楽ではないのです。

ところで、この『ワイヤーフレームの君』は一体誰なのか？ 心理学とかアニメの設定とかでピンとくるのがあったのが、彼女はいわゆる心理学上というアニメ（anima）っていうものなのではない？ と思ったんです。具体的根拠は無いけどそう思ったんです。簡単に言えば、その男性の潜在意識のなかにある女性的側面もしくは女性性をアニメというそうです。（逆に女性内の男性性はアニスムというらしい）

アニメキャラでいえば、主人公にとってのイシュトリとか綾波レイとかみたいものなんでしょうね。（ラーゼフォンとエヴァンゲリオ

ンの出てくるキャラです。どっちもセカイ系……)

困ったことに、この夢を見てからというもの、私のなかには、変なこだわりという執着が生まれてしまいました。通勤などの人ごみの中で、この女性にシルエットとかパーツが共通する人がたまたま目に入ると、一瞬「あれはもしや？」みたいについ目で追ってしまふ。よく見れば全く別物なので、ひと安心アンドちよつとガツカリしつつ、あわてて視線を逸らすのがいつものこと。

実のところ、眼鏡や髪の色、髪型、肌の色等のパーツのどれもが類型的だから、そのうち三つくらい重複すれば、よく見れば全くの別物でもそれこそ一瞬のシルエットだけは結構一致したりする。だから、あまり心配はしてません。私は多分正常です。

ただもし、外でこの夢の女性とそっくりそのままの人物に出会ってしまったら…… ドッペルゲンガーじゃないんで死ぬことはないでしょうが、その時私は一体どうするべきなのだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9541v/>

真似してみよう夢十夜

2011年12月29日22時49分発行